
堕ちた星

飛海 ガクト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

堕ちた星

【Nコード】

N4220H

【作者名】

飛海 ガクト

【あらすじ】

—— 7日間の奇跡——。ある日、ある青年の許に羽の生えた少年が堕ちてくる。名はルカ。ドジでお人好しで、その所為で地上に堕とされた天使。青年と少年はある事情から同居し始め、そして……。テイルズオブイノセンスのスパルカ、現代(?)パロディです。

B e f o r e

未だ、梅雨の完全に明けきらない初夏。

今日の空は御機嫌が良いらしく、雲1つなくすつきりと晴れ渡っていた。

「……良い天気だ」

誰に聞かせるわけでもないが、心地良い低音で青年は空を見上げそう呟く。

降ってくるのは、ただ肌の大敵紫外線だけ。

だが青年は、帽子を深く被っただけで、其の紫外線をやり過ごそうとしていた。

「……ん？」

ふわり。

清々しいまでの青い空からは降ってくる筈のない、見覚えのない白いモノ。

柔らかく、風に吹かれれば何処かへ飛んで行ってしまいそうな程軽いモノ。

紫外線を受けるかの様に広げられた青年の右手の上に、そんなモノがふわりと載る。

「何だ……コレ」

そう、其れは問うまでもなく、青年に答えは分かっていた。

だが……何故此処に？

青年は此処に住み始めてからそう長くはないが、この辺りに白い羽を持つ鳥はいない。

鳥は鳴くだろう、と青年は思った。

風の過ぎる音しか聞こえない、地平線まで何も遮る物がない——
——在るとしたら、青年の家だけだ——このただっ広い草原に、一体何が居ると言うのか。

鳥の羽ばたく音さえ聞こえなかったのだ、まさか、鳥の羽という

わけではあるまい。

「コレ……枕に入ってる羽に似てる」

正直、青年の其の言葉は、其の疑問を解決するのに何も役に立たなかった。

ある意味では、ただ自分自身を慰める為だけの言葉とも言える。
答えの出ない問い。此処には1人しか居ないのだから、尚更だった。

……と、その時。

「ッ!？」

フと空を仰いだ青年の目に、落ちてくる人の姿が映る。

何故？ 何故？ 何故人が、空から落ちてこられるのか。

青年には事情など何1つ分からなかったが……1つ、思った事は。

『受け止めてやろう』。

丁度、青年の真上に落ちてくる形だったので、幸い上手く抱き止める事が出来た。

だが、抱き止める時の、違和感。

落ちてきた人の背に、何かが……。

「……んだ、コレ？」

驚きで掠れる声。

落ちてきた人——どうやら、少年らしかった——の背には、
あろう事が白い翼。

其れも、先程青年の手に載った、あの白い羽根に良く似ている。

「まさか……こいつの、羽根？」

少年は気を失っているらしかった。

だが今青年には、そんな事は関係ない。

生憎起こしてまで訊こうという鬼畜さは、青年は持ち合わせてい

なかった。

「……このまま放っておくわけにも、いかねーしな」

若干憎む様な口調で、青年は呟く。

そして、少年を抱え直した。

其れでも少年は起きる様子はなく、仕方なく、青年は少年を自分の家へ連れ帰った。

第1日目：奇妙な同居生活の始まり

「——やっぱ、そうだ」

確信にも似た声音で、青年は呟く。

大きな右手の平には、先程拾った白い羽根。

ベッドで気を失ったままの少年の背から生えた翼を見ていた。

「という事は、こいつは羽ばたいてたのか？」

もっと先に突っ込むべきところがあった筈だった。

だが青年の頭には、『羽ばたかないと羽根は散らないだろう』という事しかない。

羽ばたいた。……だが、途中で何らかの事情があり、気を失って落ちてきた。

只事ではないのは、空から少年が落ちてきた時から分かり切っている事であった。

「……早く起きねーかな……」

青年は拾った羽で少年の頬をくすぐる。

少年はくすぐったそうに身じろぎをしたが、どうも起きる気配はなさそうで。

ハアと溜息を吐き、視線を落とすと、今更突然少年の容姿が目に入った。

「……すげ」

一言。漏らせたのは、たったそれだけ。

しかしそれだけでも青年には精一杯だ。

何しろ、家の周り全て自分の物という状況のこの青年は、あまり人を見た事がなかったから。

勿論『あまり人を見た事がな』いだけでなく、こんなに綺麗な人を見た事がなかったのである。

しかも、少年だ。青年は当然同性に興味などなく、異性ばかりを見ていたから。

少年の肌はこんなに白くて綺麗なものか、と思ったのだった。

「……う、ん……？」

「！？」

いつの間にか、顔が随分近付いていたらしい。

少年がうつすらと目を開けると、青年は思い切り後ろに下がった。勿論拾った羽は、その手の中である。

「……こ、此处は……？」

起き上がる少年。地にたたき付けられたわけではないので、身体へのダメージはないだろう。

落ちてきてから1時間も経っていない。

しかし青年は、少年が青年をすっかり捉えるまで、何も言わずに居た。

「？ えー……えーつと……？」

「……お前、誰だ？」

漸く少年が青年に気付くと、今度は青年が先に問う。

多分それは少年も青年に問いたかった事であろう。

「僕は、ルカ。えつと、貴方は……？」

「何で落ちてきたんだよ？ それに、その羽は？」

「え？」

俺は面倒に巻き込まれるのがやなんだよ、さっさと答えろよと青年は言う。

その剣幕に少年は怯え、暫く口が利けないでいたが、青年がそれを察し少し勢いを緩めると、漸く口を開いた。

「……僕は、天使なんです」

「え……？ 天使……？」

「はい……天界を追われた天使」

少年ルカは答えた後、居心地が悪そうに視線を落とす。

「天界で赦されない罪を犯した為……こうして、地上へ落とされたのです」

「え……と？」

青年はついていけない。

しかしル力は話し続ける。

「お願いです、1週間で良いので、僕を此処に置いてくれませんか……？ 勿論、僕に出来る事は何でもしますので！」

「え？」

「あ、あの、お金とかは持ってないんですけど……でも」

「ちよっ……と待てつての！」

「！」

声を荒げた青年に、ル力はびっくりと身体を強張らせる。

「一体何なんだよ……俺は面倒がやだつつつてんだろ？ 別の所行け」

「あの、でも……」

何だよ、と言いかけた青年は、そこで言葉を途切れさせた。

何しろ、ル力が泣きそうな表情をしているのである。

別に少年がどうなるうと青年には関係がなかったが、此処で泣かれるのはあまりにも始末が悪い……。

ただでさえも面倒事が面倒なので、青年はとりあえず口を挟むのを止めた。

「僕は、此処から出られないんです……此処から出たら、もう天界に帰れないんです！」

「……別に、勝手にすれば良いだろ。俺には関係ねえ」

今度は努めて怒らない様にする。

「帰れなくなったら、もう……好きな人に、会えないんです」

「！」

「だから……」

好きな人に、と言った瞬間、青年の表情が一瞬変わった。

俯きかけていたル力は気付かなかったのかもしれない。

瞳を潤ませ、必死に頼んでいる。

「……分かった。本当に1週間で帰るんだな？」

「！ 良いんですか！？」

「ああ」

俺もな……と、青年は遠くを見た。

ル力はじつとその横顔を見る。

何も言いはしなかったが、これ以上聞くな、と青年は言っている様だった。

かくして、青年と空から落ちてきた天使の少年ルカとの、謎の同居生活が始まったのである。

第1日目：奇妙な同居生活の始まり（後書き）

名前が『ルカ』だから、天使に丁度良い様な気がします。
え、それだけじゃないですよ、理由は（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4220h/>

堕ちた星

2010年10月11日01時14分発行